

【 会員投稿 】

上州を彩った文人たち (その1)

ひまじん

近年、群馬県の全国における知名度は、栃木県と並んで、最下位グループに属するらしい。

かつては、島根・鳥取の両県が最下位争いの常連だったはずだが、この中国地方の両県は少し上にあがり、関東の二県がペケ争いをしているらしい。この評判は統計的に、厳密なものではなくてあまり権威があるものではないのだが、地元住民としては、やはり淋しい。

県勢を見直す意味をこめて、上州で活躍した文人たちを紹介してみよう。

「坂口安吾」と「南川 潤」

この二人の作家は他県より桐生市へ移り住み、桐生で死んだ。坂口安吾は友人であった南川潤の世話で、伊東から転じて、桐生市本町書上邸の離れを借りたのは、昭和27年のことである。

安吾は昭和6年『風博士』『黒谷村』等により、新進作家として認められるが、全国的に脚光をあびるのは戦後の『墮落論』『白痴』からである。

太宰治・織田作之助・田中英光らと共に「無頼派」といわれた。彼らは戦前の既成文学の批判と反逆を旗印に、新しい創造をめざした。かれらの作品に対する評価はともかくとして、その生活ぶりはいちじるしく、特異であった。即ちヒロポン(覚醒剤)を使って、大量の注文をさばき、その高まり過ぎた興奮を納めるために、催眠剤(アドルム)を飲む。この繰り返して、中毒症状におちいった。太宰は23年38歳、織田は24年36歳、田中は24年36歳で死んでいる。



—21年 書斎にて—

安吾も同様な生活ぶりだったが、頑健な肉体が彼をささえ、昭和26年に『安吾新日本地理』の連載を開始し精力的な活躍をとりもどす。この間税金の滞納問題で国税局を相手に『負けラレマセン勝ツマデハ』、競輪の写真判定にケチをちける等社会的にも反響をよんだ。桐生へ移るキッカケは群大工学部へ、着差判定写真の真贋を解明してもらうためというのも安吾らしい。

なにしろ、酒を・女を愛し、ギャンブルにハマリながら読み且書いた。やりたいことをすべてした男。

そんな言葉がふさわしい。

昭和30年脳出血で死亡。享年48歳であった。

南川 潤は 東京生まれの、慶応ボーイだ。

昭和13年『風俗十日』で、三田文学賞を受賞し文壇へ登場、都会的風俗を活写したと評判を呼ぶ。

昭和18年東京空襲の激化を避けるため、夫人の郷里である桐生に疎開して戦後も同地にとどまる。安吾より若いのだが、同人雑誌の仲間であった。但し、南川は戦後の混乱期に田舎(?)にいたためか、無頼の仲間にはならず、反面、時流からは取り残された。両者の微妙な関係を記した評論から抜粋してみよう。

[桐生に越してきた当初、安吾は病弱な南川のことを気にかけて、安吾を訪ねて来る編集者に、南川を推奨し、紹介の労をとった。しかし安吾はしだいに南川を上から見下ろす、気分になり、二人の間には心理的葛藤が生じはじめた。……ある日、妊娠した妻の三千代に向かって、俺の子でない、といって暴力を振るった。身の危険を感じた三千代は対岸にある南川の家へ逃げ救いをもとめた。安吾はゴルフのアイアンを振り回しながら、あとを追ってきた。南川はその日以来、安吾と絶縁した。]

南川は『美しい村』等の作品により、桐生周辺を讚美し、地域文化活動にも積極的に協力、文壇への再起を期していたが、その機会はなかった。安吾の後を追うがごとく、その年42歳で病没する。

後年 吾妻公園の入口に、次の碑が建てられた。

「何かしら故郷のように
この街を愛する心になっている」



会員投稿のご協力有難うございます。現在の未掲載原稿は、三件です。引き続きよろしくお願ひします。

● 今月の【 細野水彩画廊 】：『百合満開』

<http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/hosono2012-07.pdf>

● 【 須永写真ギャラリー 】：『霧にけむる』

<http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/sunaga2012-07.pdf>